
【夢幻の大陸詩】 Blue Bird & Black Bloom? ~勇の章

水城杏楠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【夢幻の大陸詩】 Blue Bird & Black

k_B100m? → 勇の章

【Zコード】

N7023X

【あらすじ】

身寄りのないユティアは少女でありながら少年の奴隸として安く売られてしまった。そのまま三年もの月日が過ぎたある日、ついに少女と知られて身の危険を感じた彼女を救つたのは、野性的な青年カディールと、女神のように美しい容姿の青年シオンだった。彼らはユティアに衝撃の真実を告げるのだが、すぐには信じられず……。奴隸生活から解放されたユティアは、次第に幸せとはなにかを理解していくのだが、それに絶対量はなく、相対的にしか計れないもの

だつた。――舞台は戦乱続く古代、滅びゆく国とその再生の物語、
第一部。

たいていの恐怖には、もう慣れているつもりだった。

何も見えない闇夜も、身体に注がれる冷たい雨も、何日も続く空腹感も。

盗みをして追いかけられたり、差別の眼差しを向けられたり。どんなことにも、一人でじっと耐えてきたつもりだった。

(けれど、こういうのは嫌だ)

金持ちの男たちが何人も、じろじろとこちらを見ていた。誰もがじやらじやらと、見せびらかすように宝石を身に着けていた。あの指輪ひとつ、売ればきっと一ヶ月は生き延びられるのに。

木でできた窮屈な箱の中。けれどそれが、いまの世界のすべて。ここに閉じ込められてもう何日たつたのか、数えるのをやめた。

逃げたい……けれど、もう疲れてしまつて、そんな気力もない。こういう人たちに捕まつてしまつたときから、もう諦めるしかなかつたのだから。

男たちの視線から目を逸らすのが精一杯で。

最後の、悪あがき。

もう、にらみつけてやるだけの力も絞り出せなくて。

「これはいくらだ？」

背の低い太つた五十代の男が、あごで示したのが自分なのだと、薄暗い中でもわかつた。ほかの多くの子供たちもいつせいにびくりと肩を震わせたが、指されたのが自分でないことに気づいて安堵の雰囲気が流れる。

(どうせだれも、助けないし)

我が身だけで精一杯。

「こんなひょろひょろした男の子でいいんですかい？」

帽子を深く被つた痩せ型の男が、薄く笑いながら木の格子に手をかけた。これは、子供たちを現実から隔離する境界線だ。この中に

しかし、自分たちの未来は入っていない。

いや、この中にすら、未来なんてない。

そんなものは、この世界のどこにもない。

- 7 -

静かに息を吐いた。

本当は女の子だと言いたいけれど、働き手にならない女の子は売
れないからだめらしい。身なりがよければ娼婦にでもするんだがな、
とぼやくのを何度も聞いた。娼婦の意味はよくわからなかつたけれ
ど。

「使い捨てにはちょうどいいだろ？」「

髪の毛のほとんどない男の後頭部に、後ろの壁にある灯籠の薄い光がゆらゆらと映る。

格子を開けられて、出ると命じられた。逆らはれとはできません、立ち上がつたらふらりと立ちくらみが襲ってきた。段差につまずいて転んでも、誰一人として手を差し伸べなかつた。

「なんだ、食べてないのか」

「はあ、すみませんねえ。いやとしてもあまり余裕がないもんですか？」

「ここでは自分で盗まなくても食べ物が出てくることは、唯一ありがたいことだつた。たとえそれが、誰かの残飯だつたとしても、一口で終わりそうなほどの量だとしても、毎日一回、自分で探さなくても食べ物は勝手にやってくる。

「まあいい。名前はあるのか？」

「おい、名前はなんだ？」

帽子の男は、そんなことも知らずに何日も食べ物を貯え続けていた。こうして売り払うためだけに。

「……ユ、ティア」

乾いた唇で、なんとか名前を口に出した。素直に答えなければ、また鞭で打たれるだけだ。食べ物をもらえる代償に、自由がなくな

つた。

だのに、じゅうのまつがましだと思えるのは、生きたかつたからだ。

みつともなくとも、本能がそう訴える。

自由が、この空腹を満たすことは永遠にない。

「女みたいな名前だな。歳は」

「じゅ、十……さい……」

本当は十一歳だったが、そう言えと命令されていた。歳が若い方が高く売れる。背も低く、痩せすぎているからそのくらいには見えるといふ自覚はある。

「まあまあ、お安くしますんで」

そう言つて帽子の男が提示した金額は、安い宝石も買えないような値段。そんな価値しかない。

太った客はその金額に満足し、すぐさま支払つた。いとも簡単に。（あれがわたしの、価値）

十歳の男の子。

偽りだらけの経歴で、売られていく。

自由のない檻から、また自由のない檻へ。

場所だけが変わつても、この身を置く状況は変わらなかつた。

幌のない安っぽい馬車にコティアは乗せられた。どこに向かうのかもわからなかつたが、格子から出てきた外では、久しづりに見る太陽が頭上高く、輝いていた。

薄暗い場所にいたコティアには、眩しそぎる光だつた。

「今、なんて……？」

かすれた声。

それでも無意識のように、唇が動いていた。
何を言われたのかわからなくて、ただ。

「……私は、降伏すべきだと思うのだ。カディ」

左手に持っていた剣を落としそうになつた。ぎりぎりのところでは、
踏みどじまつた。しゅっと一振りしたその金属が、いつもより軽や
かにすら感じた。

「クレイ　なに馬鹿なこと言つてるんだ？」

連日の戦で心が弱くなっているのか、それとも狂い始めているの
か、その両方なのか……。

どちらにしろ、カディには正気の言葉ではないように聞こえた。

「　このように、我がエリシャの大地を穢してまで守るものは
あるのか？」

その問いかけに、カディは返す言葉をすぐに見つけられず口を噤
んだ。

文字通り最後の砦となつてゐるこの大離宮の屋上からは、東西南
北の景色を望むことができる。クレイの灰色の双眸が、壊れかけた
街壁の向こうにある遠くの山を見つめた。

美しく紅葉していた山々の景観は、わずか三日で焼け野原に変わ
つた。炎を放たれて、それを消火する余裕も逃げる体力も残つてい
なかつた民たちが、大勢焼死したという。

国力は弱まり、物資は民にまで届かない。

日々悪化していく戦況に、兵も氣力を失いつつあるのを感じてい
た。

「カストウールは大国だ。……我がエリシャ王国の民を受け入れて
くれるのなら、それで民が生き延びられるのなら、私はそのほうが

いいと思うのだ」

大地を削る、嵐のよつな強い風。結わずに流した彼の長い髪が、その表情を隠した。

「生きてさえいれば、いつかきっと、希望や夢をまた、得られるのではないか……？ 民が餓えていくのを……苦しんでいるのを、もう見ていられぬ……」

嗚咽を堪えるように、クレイは声を絞り出す。

覚悟がまだ、揺れている。

「でもあんたは王だ」

「わかっている」

「本当にその意味が……っ」

わかつているのかと最後まで言葉を続けられなかつた。

カストウールは、すでにエリシャの王族をすべて処刑した。先王の兄弟とその家族……女子供にいたるまで、王位を継ぐ可能性のある濃い血脉は、すべて排除した。

彼が降伏すると決めたら、たしかに戦は終わるかも知れない。

けれど、そのときクレイは王ではなくなるのだ。

生きてさえいれば…… カディイはその言葉がクレイにこそ必要な

ものなのだと知つてゐる。

「わかっているよ……」

顔を上げた彼の表情が、すべてを受け入れようとしていることを示していた。

「三年前……私は王位を継ぐべきではなかつたな」

それが戦争を長引かせた。

彼を担ぎ出した重臣たちも、今ではそれをつすつす感じているのだが、口には出せないでいる。

「なら、エヴァン王国のように従属すればよかつたのか？ なんの抵抗もしないで奴隸みたいに……っ」

かつて同盟を結び友好的であった国の名前に、クレイはカディイにもわずかにしか感じ取れないほどの悲壮を見せた。

絶望ではなく、ただ純粹な切なさだったのかもしれない。

どちらの選択肢が正しかったのかなんて、今でも誰も、わからな
いのに……。

「そんなことは

カディはその言葉を聞いていなかつた。クレイも途中で言辞を飲
み込んだ。

まったく気配を感じさせずに、一人の目の前に五人もの男が現れ
たのだ。こんなことはもう珍しくなくなつていて、カディも驚か
かつた。

（魔道王国が……っ）

純粹な力だけでは対抗できない。

それがカストワール王国。

「ルーフェイザ王っ！ 討ち

血にまみれたその剣を握つた男は、鼓舞の言葉を最後まで続ける
ことができなかつた。カディの剣が一閃し、同時に三人が声も上
げる間もなく絶命していた。

そして次の瞬間には、手首を返した彼の剣技の前に、残りの一人
も床に倒れた。

「カ、ディ……」

座り込んだ彼の双眸は、光を失い、彷徨うように護衛騎士の姿を
探している。

カディはクレイの左手を握り締めた。震えてはいなかつたが、そ
の額が力なくカディの肩に落ちてくる。

血を嫌い、争いを嫌う、この戦乱を生き抜くためにはあまりにも
弱く、優しい王。

だが、カディももう、手加減をして敵を逃がすわけにはいかなか
つた。彼を生かすためには誰かを殺すしかないのだ。

「俺は認めない！ あんたがいるから俺はここにいるんだつ

カディに生きることを教えたクレイが、逃げようとしている。そ
れが許せなかつた。そしてなにより、クレイの決断が客観的に間違

いではないかもしないと気づいてしまった自分自身が許せなかつた。

「あんたは殺させない」

「ありが、とう」

弱い光で、クレイはカディを見上げた。

平和な世の中ならきっと、稀代の英君と讃えられただろう、叡智を秘めたまっすぐな瞳だった。

そこに一抹の希望が落ちてきたような気がして、カディは眉根を寄せた。

危うい……なにか。

壊れかけたものを必死でつかむかのように。

潤いのないひび割れた大地に、ひとつそりと生えた一本の苗。

「それならば、その力で私の義妹を、守ってほしい」

「義妹？」

こんなときに何を言い出すのかとカディは瞠目した。クレイはエリシャ王族最後の生き残りだ。従兄弟にいたるまでもう誰も、残つてはいないというのに。

「私はもう、お前に守つてもらわなくて……いいよ。戦を、早期終結できるのは、私しかいからね」

先ほどよりも柔らかな、だが強い口調に、彼が必死で覚悟を決めようとしているのだとカディも悟つた。

彼が王として決意したのなら、それにはもう、反駁できない。

カディがクレイを守つて落ち延びるのは、今の段階ならば容易だらう。だが、あとに残された民や臣を、クレイはきっと省みずに生きしていくことはできない。そしてカディは、クレイを罪ひととして生き永らえさせることを選べない。

「お前はもう、覚えていないかもしないが……私には義妹が、いる

「何を言つて……」

「もう、四年になるな。義母上と義妹は父上の采配で、エリシャ

を去つた。すでに長い戦乱になると予期しておられたのだろう。「

戯言には、聞こえない。

遠い記憶を、呼び起こす。

まだ幼かつた二人が、よく城を抜け出して向かつた先は……第三離宮。

「義母上は身分のない方であつたから、離宮に住んでいたな。私はよく、義妹に会いに行つた。お前も何度か一緒に来てくれたよ」

「そういえば……」

そんなこともあつたかも知れない。

もうあまり覚えていなかつた。すぐに戦況が激化して離宮には行けなくなり、日々に追われて思い出に漫る余裕がなくなつたから。「カストウールはその子を探している、きっと……。だからどうか、私の代わりに殺させないで、ほしー」

最後の我が娘。

個人としての望みなど、何一つ叶わなかつた王の、ひとつつの灯火。

「名前は？」

カディはもう、それすら忘れてしまつていた。

「義妹、の、名前は……」

クレイに顔を近づけて聞いたさやくような声を、カディは何度も反芻して今度こそ忘れなきよつ胸に刻み込んだ。

あつとコティアが思つたときは遅かった。

その両手に乗るはずだった高そうな絵柄の陶磁器の皿は、一瞬のうちに足元へ落とした。

派手な音。

「……」

素足に破片が刺さつても、悲鳴を上げることはできない。

広い食卓では、そんな様子を誰も何もなかつたことのように、食事が続いていた。奇妙に豪華で、わざとらしげほどに異なる時間が流れる。

取りにくいやつに皿を渡してきた主人は、「こちらを振り返る」ともなく客人たちと大声で品なく笑っていた。

コティアは残飯とわずかな血にまみれた破片を拾おうとかがんだとき、ようやく男が顔をこちらに向けてきた。

「すみません、教養のない子で。昨日買つたばかりなんですよ」「いえいえ、まだお若いようですねけれど、おいくつで」

「十五ですよ」

「ああ、なるほど」

客人たちが、気味悪いほど優しい瞳を一斉に向けてきた。コティアはいそいで破片を集めて立ち上がる。破片で傷ついた足がずきずきと痛んだ。

(……だからわざと、怪我させたんだ)

今日、このあと逃げさせないために。

「じゃあまたあとで」

主人の一一番そばにいた男が、ねつとりと絡みつくような視線でコティアを見上げた。それだけでせっかく集めた破片を取り落としそうになつたが、なんとかこらえて逃げるよつて帷をぐぐる。

「なにやってるんだいっ

廊下の角を曲がったとたん、問答無用で長身の女の容赦ない平手が飛んだ。傷だらけの足で立つていられずに、コティアは床に倒れこんで、手に持っていた皿の破片が再び飛び散った。

「つたく、三年も騙してくれたかと思ったら、やつぱり迷惑ばっかりだねこの子は」

「……」

卑しいものに対する視線で一瞥され、露出の高いひらひらとした服を大げさに翻しながら、女はコティアの腕をつかんで無理やり立てさせた。

「……痛」

女の握力が強かつたわけではない。

服に隠れて見えないが、そこにはぶたれて出来た無数の傷が、完治せずに残っていた。

「誰か？ ここを片付けときな」

甲高いその一声で、コティアよりも幼い少年がどこからともなく現れて、散らかったものを片付け始めた。その様子を見向きもしないで、女はコティアを引きずるようにして歩いた。

何度も転びそうになり、そのたびに女の罵声が飛んだ。

廊下のつきあたりの部屋に連れてこられ、コティアの背中を押して部屋に入る。その空間の大半を占める大きな寝台に倒れこんだ。

「いいかい？ そこで待つておくんだよ」

「え」

女は部屋を出て行つた。

「……ま、待つ」

その部屋には珍しく布製の帷ではなく、分厚い木の扉がついていた。

女はコティアを振り返ることなく部屋を出た。外から扉に錠が下ろされる音がした。

(逃げ、なくちゃ……)

奴隸の少年が実は少女だとわかつたとたん、この遊里に売り飛ば

された。この部屋にいればどうなるかなんて、少し考えればわかることだ。もう娼婦の意味もわからないほど幼子ではなかつた。

だが、体力を失っているユティアが少々押したくらゐでは、その扉は当然びくともしない。格子の窓に錠はないが、ここは一階だ。飛び越えても地面はないし、たとえあつたとしても、庭にも多くの男たちが警備という監視のもとにうろついているのを知つてゐる。ユティアは扉に寄りかかるよつにして額をつけた。

立つてゐるだけで、先ほどの傷が痛んで血がにじんできた。何故こんな目に……何度も考へてきた言葉が再びよぎると、涙まで止まらなくなる。

「……おね、がい」

もう、かすれた声しか出てこない。

扉を必死で叩いたが、外に聞こえるほゞの音を出すことすらできなかつた。

(誰か)

(　　あけ、て)

縋るように、扉に体重を預けるよつにして両手を置いた。体力も失つていて、空腹も手伝つて、気が遠くなりそうになる。そつと双眸を閉じかけた、そのときだつた。

視界のすみで、なにかが淡い光を放つたよつた気がして、はつと目を見開いた。

(　　扉、が)

どこからの発光かわからないが、ただ輝いていた。小さな命の、灯火のように。

少しだけ扉から離れると、かたりと小さな音が扉の外で聞こえた。不思議に思つて押してみると、何の抵抗もなく扉は開いた。かけられたはずの錠が床に落ちている。

(　　誰、かいる、の?)

おそるおそる扉の外をのぞいてみるが、そこに人影はない。まさか風などで金属の錠が落ちるはずもないだろう。

(……また、だ)

コティアのまわりでは、ときおりこんなことが起こっていた。
寒くて凍えそうだった夜、突然近くにあった椅子が燃え出して怒られたし、のどが渴いて外で倒れたら突然雨が降ってきてびしょぬれになつてやつぱり怒られた。

(今日は錠が壊れた、のかな。でも何で?)
だが、その疑問はすぐに封印した。逃げるならこれほどの好機はない。

コティアはもう一度、頭だけを廊下に出して見回してみると、「何をしているつ!」

廊下の奥の角から、男の罵声が飛んだ。はっとコティアが身を縮めたときには、男はコティアに近づいて腕をつかんでいた。足元に落ちていた錠を一瞥する。

「お前が開けたのか?」

「ち、違……」

先ほどの食事の席にいた三十代の男だった。下品な笑いばかりを浮かべる商人風の男たちばかりの中に、彼だけが剣を帯びて旅人のようなすつきりとした格好をしていたから、コティアも覚えていた。「ふん、何も知らなくても血筋は本物ということか」男はコティアを寝台に突き飛ばした。

(なに? ちすじ、つて……)

だがそんなことを尋ねることはできなかつた。

男が腰の剣をあつさりと抜いたのだ。

鞘を離れたその切つ先は……コティアのほうを、向いていた。

何が起こつているのか、これから何が起こるのか、コティアにはまるでわからなかつた。この状況……何かがおかしい。剣。鋭利な、金属。首筋に近づいてくる。

「悪いね。あんたの命で大金が手に入る。仲間と組んでちや分け前も減るしな」

「え」

「それほど価値があるよつには見えねえけど」
はつとコティアはやつと気づいた。

この男は、自分を殺そうとしているのだと。
善意なんて、コティアのまわりにはどこにもない。
その切つ先が目のためにあつて、コティアは逃げることもできなか
つた。ただ、その剣と男を交互に見ることしか。

「でもまあ、その前に」

男はあつさりと切つ先を床に落とす。

太い指が、コティアのあごをつかんで上を向かせた。

「少しくらい遊んでも悪くないな。ここはそういう場所だろ」

「……っや

剣を苦もなく扱う男の力は強くて、コティアは顔を背けることも
できなかつた。

乱暴に寝台に倒されて、その上に男がのしかかつてくる。
肩を抑えられて身動きすらできない。簡単に服を破かれてしまつ。
もともと着まわしたぼろ布のよつな服だつた。

恐怖で、声までも固まつたよつに何も出てこなかつた。

(い、いや……だ……)

たとえ大声をあげたとしても、誰かに助けてもらえるなんて思つ
ていない。そんな優しいところじやない。

だから逃げないと。

自分で、なんとかしないと。

(　　い、わい……)

急に身体が熱くなつた。

内から湧き上がる、なにか。

熱。

「なんだつ？」

男が思わず両手を離してあとずさる。
手が、全身が、光つてゐるよつに感じた。実際に目で見えたもの
なのか、わからぬけれど。

自分の身体ではないように思えるほど、奇妙な光景だった。

息が、できない。

苦しくて、胸を押された。

少し顔を上げると、男がこちらを見ていた。険しい表情だった。目が合うと、何かを思い出したかのように剣を握りなおし、大げさなくらいに振り上げた。

「ちっ、恨んでくれるなよー！」

ユティアの身体は、反射的に縮こまる。何ももう、考えられなかつた。生きるとか、自由とか、何も思い浮かばなくて心が空になつていた。

ただ、苦しい。

本能だけがそれを訴えていた。

「　　ばあつか！　恨むに決まつてんだろーがっ」

どこからか、別の声が聞こえた。

誰かの手に肩を強いくらいに握られたかと思うと、胸元に抱きしめられた。同じタイミングで、耳元にキーンと高く、金属同士が打ち合ひう音を聞いた。

「頼む！」

あまり強くない力で突き飛ばされた。後ろに倒れるかと思つたら、冷たい手が肩を支えた。

「はいはい」

ずいぶんと落ち着いた、静かな声だった。

高くもなく、低くもなく、どこか遠くから漏れる楽器の音色のようだつた。

近くにあつた大きな白い布がすっと視界を舞い、裸に近かつたユティアの全身が覆われた。

「大丈夫ですよ。大きく深呼吸して」

耳元で囁かれる、美声。

後ろで支えられ、背中をゆっくりとさすってくれた。

熱いものがそれだけで急速に身体の中に消えていく。自分でもわ

けがわからない。

顔を上げると、コティアを殺そつとした男は、たくさん人の血を流して床に倒れていた。もう生きていのいのだろうとどこかで思った。空腹で死んでいった子供たちはたくさん見てきた。彼らよりもすぐ死ねる分、楽でいいのかもしれない。ぼんやりとした頭で、考えたのはそれだけだった。

「こいつを売ったやつもたたき切ってやるっ！」

「そんなことしても意味がないよ。それより早くこの場を離れたほうがいい」

「わかつてることだ！」

二人の男たちは、同時にコティアのほうを見た。

剣を持つた男の、深い青の双眸が、特に強くまっすぐにコティアを射抜く。

（……夢、かな。それとも、わたし、も、もう死んでしまってるのかな）

だつてこんな、綺麗なものを、この町で見たことがなかった。死んだら別の世界に行ってしまうと母が言っていた。ここがその別の世界なのかもしねりない、

だつたらここで、母を捜そう。

（ああ、よかつた……）

新しい世界は、きっと美しいものたちで出来ている。ほつとしたら全身から力が抜けた。

「おいつ！」

「　　気を失つてしまつたみたいだね」

二人のそんな声を遠くで聞いた。

やつと、見つけた。

クレイとの約束を、見つけた。

エリシャから遠く離れた地で、やつと。

「ユ、ティ、ア」

初めてその名前を、口に乗せたら少しだけ安堵できた。

昔遊んだという記憶も、おぼろげながら思い出していた。ずいぶん美化されてしまったかもしないが、カディールの持つ記憶の中では、美化できるものといえばその一年間しかなかつた。

カディールは、その額に手を伸ばしかけて、止める。

硬くまぶたを閉じるその顔は、ずいぶんと痩せこけていて傷や痣だらけだった。顔だけではない。晒していた素肌は荒れていて、治つていらない傷がいくつもあつた。どれほどの仕打ちを受けてきたのか想像もできないほどだ。

『その力で私の義妹を、守ってほしい』

クレイの、最後の夢。

(ああ、わかってる)

その約束があるから、カディールはクレイの後を追わずにまだ生きていける。

「ひどいね……少女にこんなことを

「なんとかならないのか、シオン」

ユティアの細すぎる身体を支えているシオンは、少し息を吐いてユティアの伸ばしたまま手入れもしていない前髪を優しく梳いた。極度の栄養不足からか、この少女はあまりにも小柄に感じる。

「魔道では無理だよ。早く神殿に行つたほうがいい」

カディールはちらりと扉のほうに視線を向けた。

騒ぎを聞きつけたのか、廊下から何人かの足音が聞こえている。隠す気もない、荒々しい気配。

「どうすんだ、ここ」

コティアはここに商品とことことになつていて、カティールたちが連れ去つたことを知れば、意地になつて追いかけてくるかもしれない。

「そうだね」

シオンはコティアをカティールに渡すと、ゆっくりと右手を掲げた。中指の銀の指輪が瞬時に長杖に変化する。

「施錠せよ」

簡潔な言葉で、扉は手も触れていないのにばたんと閉じた。

次に寝台に敷かれていた大きな布を引き抜き、人の大きさに丸めて男のそばに置く。杖から炎があがり、あつという間に男とその布を包み込んでいった。

「これで時間かせぎができる」

それで十分だ。足取りはすぐに消せる。

煙がすぐに充満してきた。この部屋は一階だったが、カティールはコティアを抱きかかえたまま、躊躇することなく窓から飛び降り、シオンもそれに続いた。

『貴女はお姫様よ』

大きなお屋敷のご主人様。

たくさんの使用人、綺麗なドレス、大きな庭のこぼれる花。
どれもみんな、お姫様のもの。

小さな可愛いご主人様。

『じゃあおかあさまもおひめさまね』

『ふふ、ありがと』

優しい香り。

そこにもうひとり。

『おにいさま、いらっしゃい』

『やあ、元気にしていたかい?』

綺麗なおにいさまが、ときおりお姫様を訪ねてくる。とびきりの
笑顔。

『今日はね、私のお友達を連れてきたよ。お前も友達になつておくれ』

『ええ、もちろん。おにいさまのおともだちはわたしのおともだち
よ』

なにひとつ疑うこと知らないお姫様は、純真に答える。

おともだちは、深い紺碧のひとみをお姫様に向けた。

『彼の名前はね』
なまえ、は……。

はつと田を開けたらそこは、現実だった。

(やつぱり、夢……)

それは、母が作ってくれたおどぎの世界。

大きな屋敷に住む、お姫様の物語。それを自分と重ねて空想するのが、あのころは楽しかった。

実際には母とあばら家に住んで、藁で籠を編んで売る生活だったけれど。

お姫様には、穏やかで妹思いの兄と、乱暴だけど優しい友達がいる。

庭には池があつて三人で魚を捕つて遊び、少し遠くに出かけて使人間に怒られ、同じ寝台で昼寝をして同じ夢を見た。

空想の中ではどんなことも楽しめた。

(……でも久しづりだなあ、これを思い出すの)

母がいなくなつて五年。一年は路上で生活し、そのあと三年は奴隸扱い。いつのまにか、こんな空想の世界は忘れていた。なぜ今頃になつて思い出したのだろう。

「お目覚めになりましたか」

誰かがいるとは思わず、ユティアはびくんと肩を震わせた。

窓から西日が差し込んでいて、少し薄暗い。何故こんな時間に自分が寝てしまっていたのかわからなかつた。

(……お、怒られる、また……)

あわてて起き上がつたら、いつもと何かが違うことによつやく気づいた。

「え？ な、なんで」

ユティアはやわらかい寝台に寝かされていた。いつもなら硬い床で眠り、翌日は疲れが取れないどころか、身体中の痛みを抱えていなければならなかつたのに。

(そ、そんなことより……仕事)
夕方だというのに寝ていたと広まれば、またどんなことをされるかわからない。

「まだ起き上がりないで。足、痛いでしょ」
その優しい声がまさか自分にかけられてるとは思わなかつたコティアは、この部屋にほかにも誰かがいるのだろうと思いながら、よろよろと立ち上がつた。

「…………」

痛くても声を上げないことに、慣れていた。

そういうえば足を怪我した。でもいつ。すぐには思い出せない。とにかくあわてていて、コティアは服の裾を踏んでしまつた。バランスを崩して前に倒れるしかなくなつた身体を、誰かの手が支えた。

(あつ)

反射的に身を引いた。

(ぶたれる…………つ)

その場に両膝をついて頭を低くする。これももう、条件反射。けれど、その震える肩に注がれたのは、鞭の嵐や罵声ではなく、優しく触れる手のひらだつた。

「すみません。何のご説明もしていなくて。顔を上げてください」「すぐ近くで聞こえる穏やかな声が、自分に向けられているのだとよつやく思ったコティアはおそるおそる顔をあげた。

(まだ、空想の夢…………続いてたのかな)

だが、コティアの目の前にある顔は空想の枠を超えた、まるで女神だつた。長い睫毛の奥の優美な翠の瞳は、自分よりもよほど女性らしい光を放つていた。ゆつたりとした長衣と長くまつすぐ伸びる銀色の髪の毛が、風を受けて柔らかに揺れた。

こんな綺麗な顔を想像すらしたことはなく、ぽかんと見上げてしまう。すべての造形が完璧に整えられた芸術作品のような容姿なのだから。

けれど、なぜだろ？、空想の女神であるはずなのに、その聲音はあきらかに男性のもので不思議だつた。

よく見ると、自分の着てゐる服もおかしい。いつものぼろ布ではなく、露出がほとんどない長いスカートの、女性の服だつた。裾を踏めるほど長い服なんて、今まで一度も着せてもらつたこともないのに。

「……夢の中なのに、こんなのって。……それともわたし、生きていないの？」

視界は少し暗いものの、まわりも変にはつきりとしていることにも気づいた。

「どれが夢でどれが現実なのか……。
わからなくなる。」

「ここは現実ですよ。ちゃんと生きてます」

「で、でも」

「シオン、買つてきたぞー！」

「こんな現実があるはずないと言いかけたとき、女神の青年のうしろにもう一人の男が現れた。

「ああ、ありがとう」

女神は何かを受け取り、それをコティアに手渡す。

「秋だから、いろいろな種類があつてよかつた。どれが好きですか？」

？」

大きな籠。

その中にはすぐに食べられる果物がひとつさりと入つていて。中には見たこともないものもある。

「……っ？」

食べていいいのかと尋ねる余裕もなく、差し出されたそれを見て急に喉の渴きを思い出し、コティアはむせぼるようにその籠にあつた果物のひとつを食べてしまつた。

が、二つ目に手を伸ばそうとしてから、はつと気づいて顔を上げる。手に持つていた食べかけのそれを、落としたことにも気づかず

」。

(な、殴られる……また)

知らずに身を硬くする。謝罪の言葉など「」では意味がなかつた。

ただ、耐えるしかないのだ。

震える身を縮こませ、コティアはそう覚悟して俯いた。

だが、いつまで待つても彼らは殴るどころか怒鳴ることもなかつた。

「貴女の分ですよ。でもあとでちゃんとした食事もしましょウ」「え？」

女神は、慈愛の微笑を返した。これもまた、初めてのことだつた。
(殴られ、なかつた……?)

以前、もう捨てるしかない余りものの果物を勝手に食べただけで、散々殴られたあげくに三日は食事をもらえなかつたことがある。やつぱり夢かもしけないと、コティアはまた混乱する。けれど、夢だといつのに、空腹だつた。

「おい、ぼけつとしてるけど大丈夫か？　まだ寝ぼけてるだけか？」
女神の後ろにいた男が、コティアに声をかけた。

「寝ぼけ、て、る？」

夢の中だというのに、奇妙な質問だ。

「どうやらまだ、夢うつつのようで」

男がコティアに近づいてきて、じつと顔を近づけてきた。
彼の双眸は、今までコティアが見たどんなものよりも美しい青の色をしていたけれど、その物言いはかなり乱暴だつた。

「やつぱり、現実じゃない……」

こんな綺麗なものは、この世界に存在しない。

「は？　なんでそうなる？」

あきれたように男がつぶやく。

「ちゃんと説明さしあげなかつた私たちも悪いんだよ、カティー

ル」

「じゃあお前がしろ、シオン」

青年は窓のほうに寄りかかり、外をちらりと眺めながらもこちらを一瞥する。銀髪の女神が、そつとユティアを抱き上げて、寝台に座らせてくれた。

「ここは神殿といいます。私たちのような旅人が休憩する場所を、安く提供してくれるんですよ」

天神クリスナードに祈りを捧げる場所。

それが神殿だ。たいていどの国どの町にもあるらしいというのユティアも知っていた。

神使いと呼ばれる人々が働いていて、天神と万物に感謝しながら質素な生活をしているのだという。どの国にも属さない代わりに、どの国内政にも干渉しない。

「だから、とりあえずここにいれば少し安全です。ほんの一時ですが」

安全。

殴られたりしないという意味だろうか。

「私の名前は、シオンといいます。あちらの粗雑な男はカディール」「粗雑はよけいだ、粗雑は！」

カディールと呼ばれた青年が、たしかに粗雑な物言いで反論した。透き通った紺碧の瞳の彼は、大きな剣を背中に背負つた、いかにも剣使いという簡素ないでたちで、長い赤茶色の髪の毛を後ろで束ねている。ぶつきらぼうだが、恐ろしいという印象はなかった。

「私たちはずっと、貴女を探していました。奴隸商人に連れ去られたと聞いて、その場所を探していったところ、運良く貴女を見つけたんですよ」

シオンはカディールを無視して話を続けた。カディールは会話に入る気がないのか、気にする様子もなく相変わらず窓の外を眺めていた。

「ここは、エヴァン王国のラタの町といいます。知っていますか」ラタの町、これは知っている。けれど国の名前まで聞いたこともなかつたから、曖昧にうなずいた。

「貴女はお母様と、七年前にこの町に来たのですよね」

「……どうして、それ、を」

あのころのことは、ほとんど覚えていない。

もう、母の名前もわからない。

五年前に死んでしまった。そのときの状況はもう、覚えていないかつた。けれど、母がいなくなつて、あばら家を見知らぬ人々に追い出されて、一人になつた。

「十一年前。貴女がまだ三歳だったとき、カストウール王国が、貴女とお母様の住んでいた国であるエリシャ王国と戦を始めました」ぽかんとただ、シオンを見つめ返しただけだつた。実感がない……というよりも、なぜそんな話をユティアにするのかわからなかつた。

（戦……）

母が、戦はよくないことなのだと言つていたことを、突然思い出した。そのときも実感がなく、幼いユティアは何か分からず何度も聞き返して、そのたびに母は嫌な顔もしないで答えてくれていた。

今まで、生きていくことに必死で、母の言葉を思い出す余裕はなかつた。ただ、母の顔だけはいつも、寝る前に思い出すようにしていた。

忘れないように、刻みなおすために。

「貴女とお母様は今から七年前にエリシャ王国を出で、かつて同盟国であったこのエヴァン王国に逃げ込みました。知り合いの方に後見していただく話だつたのが、カストウール王国を恐れて、反故にされてしまつたのだと、最近やつと聞いたのですが……」

どうしてこんなに自分たちのことに詳しいのだろうか。それともすべて、何かの目的のためについている嘘なのだろうか。

シオンは寝台に座るユティアの隣に膝をついたまま、なお話を続けた。

「十年近く続いた戦は、もう終わりました。エリシャは負けたので

す。……けれど、王妹殿下が生きている」とをカストワール王国は知っています。先ほどの男もその刺客

「さきほど、なの？」

「覚えていませんか？ 遊里で……」

遊里という言葉をきいたとたん、コティアの脳裏には鮮明にその映像がよみがえってきた。

「あ」

呼吸を忘れる。身体が震える。

あのときの恐怖。

全身を抑えられ、身動きも取れなくて。

息が苦しくなったとき、急に楽になったことだけは覚えている。
(たす、けて、くれた……の?)

この一人が。

そんなはずはないと思い直す。だつて誰も、他人を助けたりしない。

「すみません、思い出させてしまって。……大丈夫です。ここならもう安全ですよ」

シオンはもう一度、同じ言葉を紡いだ。コティアの震える指に、そつと自分の指を絡めて開かせた。

いつのまにか爪が食い込みそつなほど、手を握り締めていた。優しそぎる、刻。

その体温。

ここは、夢ではなく現実なのだと、コティアはやつと実感した。この女神に、触れることができる……。

「そ、それで……わたし、なにを……すればいいの？」

「え？」

彼は心底驚いたように聞き返した。

無償の愛を、コティアは知らない。

(見返りが、必要だ)

奴隸という待遇でしか、対価を返せない。安い宝石や小麦や果物

なんかと交換されてしまつかもしれない。

それが自分の知る限りの、自分の価値だった。

「わたし、は……あまり役に、立たないけど……」

「何言つてんだ？」

大きな窓のそばに立っていた赤毛の青年が、機嫌を損ねたような声を出した。それを制した銀髪の青年が、ゆっくりと口を開いた。
「私たちは貴女様をお守りするためにずっと探していたのですよ」
何か急に、話が飛躍したような気がした。不思議そうに首をかしげる。

「よく、わからないけど……」

「だからお前の言い方はわかりにくいつてんだよ、シオン」
カティールが窓際からようやく離れて、ユティアの隣に腰を下ろした。その勢いで寝台が沈み、ユティアの軽い身体が揺れる。

「あんな、ユティア」

紺碧の双眸がまっすぐにユティアを見てきた。

「あなたがその、生き残りの王妹殿下なんだぞ。それわかつてるのか？ 正式な名前は、リティアーナ＝ユティア＝エリシャ。俺はあなたの兄に頼まれて探してたんだ」

「……？」

何度も、まばたきした。

声が、出なかつた。

返す言葉も、浮かばなかつた。

二人の顔を交互に見つめ返すだけだった。

「こう見ても彼、王直属の最年少の護衛騎士だったそうですよ」
シオンはユティアを、姫君と呼んだ。

(……それって空想の中だけじゃ)

こんな[冗談]を今まで聞いたことはなかつた。

たとえば、細い枝からひつそりと落ちていぐ花の一片だとか。風で揺れる水面に映る山並みが消える瞬間だとか。
そんな夢だ。

不確定で曖昧で、けれどヨリモでも美しいとしか形容できない非現実。

けれど、ユティアは願う。どうか悪夢を見させてください、と。現実のほうがほんの少しでも幸せなら、目が覚めたときほととずる。良すぎる夢を見てしまつたら、もうそこからきっと抜け出せない。

* * *

「……やつぱり来たな。かなりの数だ」

「さすが、早いね」

寝静まつた夜にそんな声が近くで聞こえて、ユティアははつと目が覚めた。いろいろ考えすぎて寝つきが悪かったせいもあるが、どこにいても深い眠りにつくことのできない生活に慣れすぎていて、ちょっとした物音でもすぐに気づくようになつていた。

だが、いつもの固い地面でなく、何枚もの布を重ねた寝台のおかげで、前のように身体が痛くなかった。花の蜜のような香りも部屋に広がっていて、ほとんど眠っていないのに疲れはなしにとも驚いた。

暗闇の中、ぼんやりと窓際に立つカティールとシオンの背中が、月明かりで浮かび上がっている。

「一日くらい、ゆっくり寝かせてさしあげたかったけれど」「しょうがねえな。ここにいるのはもつばれてるんだ」「

カディールがユティアのほうに近づいてくるのがわかつて、ユティアは反射的に飛び起きた。もううたばかりの腕輪がくるりと半回転した。まだ、誰かがそばにいることに安心できずに警戒心ばかりが先に立ってしまうのだ。

「……おっと、起きてたのか。なりさつせと行くぞ」「え？」

「聞いてたんだろ。あんたの追っ手が来てんだよ」

カディールに乱暴に手をひかれて、ユティアは立ち上がった。まだ足に少し違和感はあるものの、神殿にいた神使いたちの治癒とう力によって、痛みは不思議なほど消えていた。

すでにカディールはすべての荷物を手に持つていて、窓枠を簡単に飛び越えると、ユティアの腰をつかんで抱きかかえ、外に出した。部屋の中ではシオンがすくっと立っていた。右手をかざすと、中指の指輪が長い杖に変化した。

それに驚いている間もなく、風に揺れる布の帷の向こうで、何人の男たちが抜き身の剣を構えてシオンを取り囲んでいくのが見えた。ユティアには彼らが見えているのに、彼らにはこちらが見えないようだった。

「ちつ」

カディールの舌打ちを聞いて、ユティアは視線を部屋の中から外に戻す。いくつかの影がこちらに向かってきているのを見つけて、カディールが左手で背中の剣を抜いたところだった。男たちは、剣や弓を持っていた。

「離れるなよ！」

声が出なくて、ユティアはただ何度も頷く。

彼は左手で剣を持ち、右でユティアをかばいながら、彼らを次々となぎ倒していく。

血の、匂いと、痛みによる叫び声が。

すぐ近くにあった。

(……ひどが、しんでいく)

この恐怖だけは、何回体験しても慣れることはなかつた。

貧民街での一年間と、屋敷で奴隸にされた三年間、周りではよくひどが死んでいた。

馬に轢かれたり、どうでもいいことで争い殺しあつたり、飢餓だつたり、した。

目を逸らして見ないようにしていても、金属の打ち合ひ音や弓が風を切る音が聞こえる。

(耳も、閉じてしまいたい)

カディールによつて、十人近い男たちすべてが地面に臥せつて動かなくなつて、剣を収める音だけが響いた。

「終わつたぞ」

それを聞いても安堵することはできなかつた。

カディールはそれを気遣う余裕もなくユティアの腰をつかんで、今度は馬の背に乗せた。カディールもすぐにその後ろに飛び乗つて走り出した。

彼の腕に支えられ、馬の背にあつても安定しているが、暗闇の中では何も見えなかつた。

「シ、シオン、さんは……」

「あいつは敵を眠らせて、あの部屋に閉じ込めるんだと。たしかに予想以上の大人數だからな、全員をいちいち相手にしてられねーし。準備してたから問題ないはずだ」

呆れたような口調。

(眠らせて、閉じ込める?)

そんなことができる魔道使いだ。貧民街にも、そういう力を持つた子供たちがいた。彼らはその力でほかの子供たちよりもうまく生きていたと思う。

「本当ならシオンのほうがあんたの守りには向いてるんだけどな」カディールはぽつりとユティアのわからないことを呟いた。聞き

返したかつたけれど、暗い夜にかなりの速さで走る馬に振り落とされそうで、もう何も言えなかつた。

カディールは強いくらいの力を右手にこめてユティアを抱きしめ、左手のみで器用に手綱を握っていた。

ユティアも無意識のうちにカディールの腕を強く握る。

どんなに慣れたとしても、夜の暗闇は恐ろしい。

寒くないのに身体が震えてしまう。

人売りとは違つて、彼らは本氣でユティアを殺そうとしているということも思い出したくなかった。

(空想の中の、おにいさまのともだち……)

蒼い瞳。乱暴だつたけれど、優しかつた。いつも兄と笑つていた。そんな世界がまさか現実だつたなんて、思いもよらなかつた。

(クレイ……カディ……)

言われてみればそんな名前だつた気がする。

(じゃああの空想は全部、ほんとうだつたの？『おにいさま』がいて、大きなお屋敷に住んでいたの？母さま……)

何も教えてくれなかつた。

けれど、母もこの空想の話を楽しそうにしてくれた。それは、空想ではなく、記憶の中の風景だつたのだろうか。

ユティアは少し怖くなつて、カディールから離れるように身じろぎした。けれど、カディールは変わらず強い力でユティアを支えている。痛くはなかつた。むしろ心強さを覚えてしまつほどだつた。

ユティアの手首には少し大きすぎる腕輪が、馬にあわせて上下に動いていた。カディールに兄のものだからと渡された。魔道力の込められたものだからきっと守つてくれる」とシオンに言われた。

たしかに母に教えられた空想の中の兄は、この綺麗な腕輪をしていた。これを見たら思い出した。

(現実にいた、おにいさま……)

馬は小さな町を離れて、小川を越えたところで止まつた。その先是木が覆い茂る丘になつていた。

カディールは自分が降りたあと、ユティアを降ろしてくれた。

「こちらです、カディール、リティアーナ様」

ぽんやりと空を見上げていたユティアに、木々しかなかつたところから、突然シオンの声が聞こえた。けれど、カディールは驚かなかつた。むしろシオンの声に振り向いたユティアのほうに目を向けていたのだが、ユティアはそれには気づかなかつた。

「行くぞ」

カディールは右手でユティアの手を、左手で馬の手綱をひいて、丘を少し登つていった。

木の陰にシオンの姿がすぐに見えた。

彼を置いて馬を走らせたはずなのにという疑問は、魔道使いのだからということで納得することにした。ユティアには想像できないような力がきっと、あるのだろう。

カディールとユティアがシオンの背のほうに立つたあと、シオンは持つっていた長い杖を地面にトンとつけた。ユティアよりも背の高い先端に、いくつもの銀色の宝玉が光っていた。

「闇に同化せよ」

地面上に強く差し込んだわけでもないのに、その杖はシオンが手を離しても倒れなかつた。不思議そうにその様子を見つめるユティアの視線に気づいたシオンが、振り返つて笑顔を返した。

「もう大丈夫ですよ」

その言葉は、不思議と安らいだ気分にさせた。

ほつと気が抜けると、押し殺していた恐怖と、身体の震えが止まらなくあふれ出す。

「……ほ、ほんとに？」

膝から力が抜けて倒れそうなところを、カディールが支えた。ゆっくりと地面に腰を下ろした。

「ユティア」

「二、こんなことがずっと……続いてくの？ わたし、ずっと、狙われるの？」

殴られる恐怖よりもずっと、いまのほうが恐ろしい。

「そのために俺たちが来たんだろーが」

「ほんとうにわたしが……そ、その……おひめさま、なの？　なに

かの間違い、とかじやなくて……」

空想が現実だつたなんて、それこそ夢に見たことだ。

いつそ目が覚めずに、あの煌めくような夢の中で生きていきたいとさえ思つたほど。

「俺はあんただから來たんだ」

カディールの強い右腕が、ユティアの頭を軽く包み込む。言葉はそつけなかつたが、体温は暖かかつた。

それでも不安だつた。

「でも、いつまで？　こうして、逃げたり、戦つたり……」

ひどがしんでいつたり、する。

「俺にもわかんねーよ。でも俺がいる限り、絶対守つてやる。殺させねえ」

「根拠のない自信に聞こえますけれど、でも私も貴女にそう誓いました」と思つています

「でもつ」

顔を上げた。

暗闇だつたが、目が慣れたのかカディールの顔がよく見えた。

「あ」

ユティアの瞳に映つたのは、頬の傷だつた。深くはないようですがに血は固まつていたが、よく見ると左右の腕にも多くの切り傷があつた。

「ああ、気にはしない。別にたいしたことじや」

「ででもつ、カディール、さんの、傷、こんなにたくさんで

見てるだけでも、痛い。

(わたしを捨てて、逃げればいいのに)
（わざわざ、彼は傷つかなかつた。

誰もが自分を守ることだけで精一杯だつた世界しか、ユティアは

知らない。自分が怪我してまで助けてくれることが現実とは思えなかつた。

「カディールは体力だけがとりえですから、姫君が気になさることはないんですよ」

「誰が体力だけだ！」

傷などないかのように、カディールは腕を自由に動かしていた。ぽかんと一人を見上げていると、カディールがユティアの頭を軽くたたいた。

「あんたさ、こんな傷くらいでびびつたらどうすんだよ、この先。俺けつこう怪我多いし」

「それは自慢することではないでしょ。……リティアーナ様、たしかにカディールは考えなしに動くところがあつて怪我ばかりですが、そういう丈夫ですしふといですし諦めも悪いです」

「それは褒めてんのか？」

二人の会話があまり緊張感なく穏やかだったので、ユティアも少し息をついた。深刻なことはなさそうだった。

「カディールの役目は貴女を守ることですから、遠慮なく楯にしていいのですよ」

「……なんかお前に言われると違つ『氣』がするぞ」

一人は言い争いながらも楽しそうだった。シオンの穏やかな様子は、理想の兄に少し似ているかも知れない。

「じゃあ、シオンさんは」

カディールは空想の中にいるけれど、どれだけ思い出そうとしてもシオンの姿はない。

「ああ、彼がエリシャでクレイ様の護衛騎士になる前からの、いわゆる幼馴染です。クレイ様と面識はありませんから、姫君はご存知ないと思いますが」

二人の雰囲気はあるで違うが、だからこそ息も合っているのかもしない。

「……てこうかさー」

カティールがコティアのほうに視線を戻して覗き込む。

「え？」

「カティールさんはやめる、カティールさんは！ 虫唾が走る！」

「君は姫君に失礼すぎるよ」

本気で言っているわけではないのだろう、シオンが笑っていた。

「……じゃあ？」

「カティでいいから。前もそう呼んでた」

「う、うん」

反論しても怒られるような気がして、コティアは勢いで頷いていた。

(……前、も)

そんな時が本当にあつたのだろうか。

「夜のうちはここにひとまず身を隠せます。まだ日の出まで時間がありますから、リティアーナ様はお休みください。いろいろあつてお疲れでしょう」

「あ、あの。シオン、さん」

「シオンでけつこうですよ」

「……わたしも、できれば……コティアのまま、が、いい」
二人がそうなら、自分もまた、もとのままの名前がいい。
敬称をつけられて、長い名前で呼ばれても、姫であると信じられるわけではない。そんな扱いに慣れていないから、どうしていいのかわからなかつた。

「わかりました。コティア」

その返事にほっとする。虚像はだって、似合わないから。

眠りやすくなる薬草を混ぜたミルクを飲ませて、ユティアはやつと眠りに落ちた。

「よかつた。よく眠つていい」

シオンがユティアの横顔を見つめて、とりあえず息をついた。

「お前が魔道力で眠らせればいいだろ」

「それでは起きたとき余計に疲れてしまうよ」

カディールは魔道のことなどさっぱりわからないから、そういうのかと端的に返した。

一人でゆっくり寝かせてやりたかったが、あまり遠くに離れてしまふと闇に隠した魔道の威力が弱くなってしまうとシオンに言われ、ユティアはカディールのすぐとなりに彼の外套を敷いて横になつていた。

「やつぱり、私が魔道で隠したものを見えていたみたいだね」

「だからお前も遊里で強い力にすぐ気づいたんだろ?」

カディールの言葉に、シオンは神妙に頷いた。魔道というのはくせがあるらしいが、そんな力のないカディールにはわからず、シオンの言葉を信じるしかなかつた。先ほどシオンは姿を消していく、自分には見えていなかつたのだが、ユティアは反応していた。それは潜在能力がシオンよりもユティアのほうが優れているという証なのだろうか。

「また昨日みたいに暴走することはないのか?」

「どうだろうね……。まだユティア自身、このお力にあまり気づいていらっしゃらないから、ないとは言い切れないね。けれど、王の腕輪はたしかに魔道抑止の力があるから」

「そう何度も起こらねえってことか」

十歳を超えてから魔道力をうまく操る練習をするのは難しいと聞いたことがある。何事も若いときのほうが吸収力がいいのはたしか

だ。

「五年もずっと……ひとりでいたんだしな。どんな生活だったんだろくな……」

「後悔しているの？」

もつと早く気づいてあげられたら、と。

けれどそれは、無理だったとカディールもわかっている。
十年、戦は続いた。

先王の戦死ですぐに降伏していれば、これほど長引かなかつたかもしれない。けれど、王の嫡男クレイが、すぐに王位を継いで戦は続いた。それほどまでに、カストウールに屈服するのを民は許さなかつた。

「やつぱり俺がクレイを連れて逃げればよかつたのか？ そしたら兄妹が再会できたかもしだれねーよな」

「こまさら言つてもどうしようもないよ、カディール。それにクレイ様はそんなことをお望みではなく……民と最後まで戦うと、そう決意されたのでしょうか？」

リティアーナ姫の兄、ルーフェイザ＝クレイ＝エリシャ。

義妹を守つてほしいと言い残し、民が生き残るために全面降伏を選択した、若き王。

「そう、だな」

カディールはユティアの黒髪をそつとなぜた。薬の影響か、彼女は軽く身じろぎしたものの、目を覚まさなかつた。無造作に伸ばされたままのそれも、神殿で洗いシオンに梳かされてずいぶん綺麗になつている。

「ずいぶん緊張してたなこいつ」

それに血が苦手だつた。そういうところは兄とよく似ているのかもしれない。カディールもけつして得意ではないが、剣使いである以上、仕方がないことだ。生きていくための手段なのだから。

「まだ、私たちのことも疑つていい様子だね」

「そりゃそうだろ」

カディール自身、クレイに言われるまで忘れていた、夢のように遠く幸福だった日々。

奴隸として殴られるような生活をしていた少女が突然、人々の頂点に立つ王族なのだと言われても信用されないとは思つ。

「でも、クレイと約束したからな。俺はなんがなんでもコティアを守つてやる」

「珍しいね。君が女性に対してそんなふうに言つなんて」
からかうその口調に、カディールは半ば本気で怒りの眼差しを向けた。

「女じやない。主君だ！」

「そのわりには尊大な態度だけれどね」

そんな態度をとられても、シオンは余裕の表情を崩さずにくすぐすと笑う。

王直属の護衛騎士　　今となつては何の役にも立たない称号だが、これがカディールのすべてでもあつた。

その王がコティアを守れといつのなら、自分の命をかけて達成させることしかない。

(次は、間違わない)

王を守れなかつた後悔は昔はあつたけれど、捨てるにした。
クレイが望んだことだ。もう、王を守る必要はないのだと、彼が命じた。そして、カディールには、生き延びさせる目的を忘れずに残した。

「でもこれからどうするんだ？　俺たちだつてもう、行くあてなんかないだろ」

第一の目的である、リティアナ姫の保護は達成した。

陥落した王宮と国を捨てて、三年以上が過ぎている。リティアナ姫同様、カディールにも追つ手は仕向けられているはずだつたし、シオンという魔道使いの協力者がいることも知られているだろう。
「しばらくは転々とするしかないかもしけない」

「珍しく無計画だな」

「うん……できればクリス聖王国に行きたかったけれど難しいようだから、もう少し情報がほしいところだね」
いつまでもエヴァン王国にはいられない。

かつてはエリシャ王国と同盟国であったこの国も、カストワール王国との戦が激化していく中で、その関係を維持できなくなつていった。今ではエヴァン王国は、カストワール王国に従属することで戦を回避した。

「クリスはだめなのか」

天神クリスナードと神殿という文化はそこから生まれ、いまでは東大陸中の国に広まつていてる。

大国と呼ばれるほどの力はまだないが、確実に成長をしており、カストワールも安易には戦をしかけられない相手のようだ。
けれど、逆にこちらを保護するような余裕はないかも知れない。
さらに、クリス聖王国の正式な後見を得れば、カストワールとはますます対立する立場に置かることになる。

「クリスにはいつか行けると思う。けれど長く滞在できない」

そうなるとこの放浪生活がいつまでも続くということだ。それはユティアにとって好ましくないとカデイールも思う。

「それに、エリシャ領にも立ち寄らないとならしいね……」

さらりと言つが、それがどれほど難しいか、想像もできない。
エリシャ領。

かつて王国と呼ばれていたその地域は今、カストワール王国の一部になつていてる。けれどいまだに、エリシャの民はそこをカストワールとは呼ばないのだという。それが精一杯の抵抗のしるし。

「なんでエリシャに行くんだ」

ユティアをあの地へ連れていきたくないという思いがどこかにある。

(いや、ちがう……)

カデイール自身が、もつ行きたくないと思っている。

思い出は美化されたままで、現実を突きつけられたくないのかも

しない。

「アセアラ王国に行きたいからだよ」

「はあ？」

本気かと疑いたくなつたが、こりこりとうときにはシオンは冗談を言わない。

南東の海を制する、別名を海賊王国。

面積こそ取るに足らない小さな国だが、それによつてアセアラを軽んじる国はどこにもない。

陸路はすべて山脈に囲まれているという天然城壁を備え、絶対に沈まない船と絶対に迷わない航海技術を持つていると言われている。どことも正式な国交がないため、詳しいことは誰も知らない。

見知らぬ船が彼らの海域を通れば容赦なく攻撃されるという危険極まりない国ではあるが、そんな場所だからこそ他国の影響を受けている。カストウールですら、容易に手出しできず沈黙を保つている。

エリシャは地理的にアセアラ王国の西にあり、海流に乗ればその海域に入り込むことができるのだが……。

「……お前の考えそなところではあるよな」

「君に思考を読まるようでは、私もまだまだね」

「 てめーなあつ」

そう軽口を叩いてはいるが、カティールはアセアラへの足がかりのためにエリシャを選ぶのは正しいと思つた。
(……だつたらエリシャであいつに会わないと)

まずはエヴァン王国最南にある王都サルナードに向かうとシオンは言つたが、その前にユティアたちは比較的大きな街カイゼに立ち寄つた。ラタよりはかなり大きく、ラタを含むこのあたりの領主の館があると説明してくれた。

「まだ窓の外見てんのか」

下の食堂に果物を取りに行つていたカディールが部屋に戻つてもなお、窓から町並みを眺めているユティアの背中を見つけて呆れた口調になる。

「うん……だつて、上から、こいつして見るのははじめてだから」「すべてが珍しかった。

ここに神殿はかなり大きく、三階建てだ。祈りのために訪れる民も後を絶たないばかりか、ユティアたちのように神殿の休憩部屋を借りて旅人も多く見かけた。敷地内には食堂や大衆浴場まで用意されていて、久しぶりの大きな風呂にシオンは喜んでいた。

三階建ての建物というのはこのあたりでも稀で、すべてのほかの建物がユティアの足元よりも下にあるようだった。そんな光景は、まるで空を飛んでいるかと錯覚させる。

「ひどがすごく、小さい……」

道端で話をしている中年の女、物売りの少年、行きかう馬。遠くにいる人々までここからでもよく確認できた。

カディールはそんなことには興味がないようで、持つてきた果物をテーブルの上にどさりと置いた。丸いオレンジが床に落ちてユティアのほうに転がっていく。

「食べろよ。野宿じゃあまり良いもん食えなかつたからな

「え……そんなこと、ないよ？」

ラタの町を出て十日以上野宿で、保存できるようなものばかりだから、種類は豊富ではなかつた。だが、ユティアには今までに見た

「ともないような食べ物ばかりで、毎日空腹になるときがなかつた。
「あんな食いもんで満足すんな」

「う、うん……」

コティアには野宿の食事でも十分だつたが、カディールの言葉に
ただ素直に頷いた。

（でも、このひとたちについてきて、よかつたんだよね。もう、そ
う決めたんだし）

本当は、少しだけまだ、怖い。

でもそれは、殴られるときの純粋な恐怖ではなく、広がっていく
新しい世界への好奇心と未知への恐れ。

コティアは転がってきたオレンジを拾つた。

丸くて、重たい。

腐つていらない果物を手にする」とはほとんどなかつた。木から盗
んでひどく怒られて、叩かれた記憶ばかりが残つている。

「カディイ……」

「はんは？」

別の果物をかじりながら、カディールは何だと應えた。

そんなときでも、彼は背中の剣をはずさない。

「あの、ありがとう……いろいろ」「は？」

「最初の日があともずつと、たくさんの人ひとがわたしを追つてきて
いたのに、カディは危険なのに戦つてるでしょ」

自分のためにしか動かなかつた人々しか、コティアは知らない。
誰かのために命をかけるなんて、物語でしかありえないと思つてい
た。

「何言つてんだ。これが俺の仕事だ」

カディールは手に持つていた果物を置いた。

「あんたが気にすることはねーんだ。俺はクレイと約束したんだか
ら」

「わたしの……兄つて、どんなひと？」

兄　　この言葉を口にすることには慣れていない。

戦があつて、彼はもう死んだ。

カディールは他人事のように淡々とそう言つたけれど、双眸だけが泣いているようで、本当は尋ねてはいけないとユティアも思う。

けれど、知りたい。

母は物語のように、お姫様とその兄と、大切な友達の話をしてくれた。どうして本当のことだと教えてくれなかつたのだろうか。会えないとわかつていたからあえて告げなかつたのか、彼を置いてきたことへの罪悪感からか。

「あいつは　　王には、向いてなかつた」

カディールは珍しく無表情だつた。

「……？」

「民を思いやり、他人が傷つくことを嫌がり、俺たち騎士の身を案じる……」

「それがいけないこと、なの？」

「戦乱で、王の役目は自分が生き残ることだ。その上で、兵を奮起させ、国のために戦わせることだ」

カディールの口調が少し、強くなつた。

「あなたも王族で、狙われてるつてことはその命に価値があるつてことだ。だからこそ、生き延びることが仕事で義務だ。俺たちにたとえ、何があつてもな。俺の命はあなたのもんなんだから」

「……そんなの」

「あんたができないと諦めるなら、俺が守る意味はない」

難しい。

生きていくことだけで精一杯だつたユティアには、想像できない世界だつた。けれど、こう言つてくれるカディールの期待には、応えたいと純粋に思つた。

神妙な顔をしてうつむいてしまつたユティアを見て、カディールは何気ない様子で果物を口にする。

「ま、今どうこうしろってことじゃねーし」

カディールなりに気を使つていてるのか、少し語氣を和らげた。

「それより、シオンはまだ帰つてこねーのか」

今朝この部屋を借りてから、シオンは用事があるといつて半日近く戻つていなかつた。何かあつたのではないかと不安になるコティアの表情とは別に、カディールは慣れているのか、特に気にしている様子もなかつた。彼が何をしているのか知つているのだろう。（そうだよね、シオンは魔道使いなんだし）

自分にも母にもそんな力があつたと聞いて驚愕だつたが、だからといつてその力を使いたいとは思わなかつた。

コティアはオレンジ剥きながら、また外を眺めた。

ここは神殿の裏側だから、ここで見えていてもシオンが帰つてきたかどうかは確認できない。大きな神殿と外壁の間に木々が植えられていて、いくつかの小さな小屋が建てられている。大通りから離れた細い道は人通りが何もなく、静かだつた。

(　　あ、ひとがでてきた)

神殿の裏口があるのか、そこから一つの影が姿を見せた。きょろきょろとあたりを見回し、一つの小屋に入ったかと思つたらすぐに出てきた。

コティアは窓から大きく身を乗り出して、その行方を目で追いかける。

何か、ひつかかるものがあつた。

「おい！」

カディールが後ろからコティアの両肩をつかむ。

「なーにやつてんだ。危ねーだろ」

「ご……ごめんなさい」

いつたん視線をカディールに向けたが、すぐに外に戻した。何が

そんなに気になるのかと、カディールも見守つた。

「あいつがどうかしたのか？」

「うん、どこかで」

ゆづくと記憶をたどっていく。あのうしろ姿には見覚えがある。けれど、コティアの知り合いは多くない。

影は自分のうしろを確認するためか、少し振り返った。その顔がここからでもよく見えた。

「あつ！」

すぐにコティアは走り出していた。部屋を飛び出す。

「おい、待てっ」

背中でカティールの声を聞いたが、コティアはあの影を見失ったくなかった。

「危ねーっつてんだろ」

「ひやっ」

階段を駆け下りようとしたところで一段を踏み外し、落ちるかという刹那にひょいとカティールがコティアの身体を軽々と抱えた。そのまま一階まで降りたあと下ろしてくれたばかりか、コティアの知らない裏口のほうを案内してくれた。

「あ、ありがとう」

「あんたなあ、狙われてるって言ひてんのに自覚ねえだろ」

「……あ」

言われたばかりだった。王族としての役目。

「ごめんなさい……」

「まあいいや。それより追いかけるんだろ。行くぞっ」

カティールは先に走り出して、コティアは慌ててそれを追いかけた。

小屋のそばにはその影はもうなかつたが、木の陰で石壁をよじ登つて敷地の外に出ようとしている少年をすぐに見つけた。

「レクトー！」

「えつ？…………うわあ～っ」

コティアに名前を呼ばれて振り返ったとき、バランスを崩して少年は背中から落ちた。幸い高さはコティアの田線より少し高いくらいだった。

「いつてえ」

「だ、大丈夫っ？」

少年は近づいてきたユティアを見上げた。

「お、おまえ、泣き虫ユティアか？」

「う……うん……あの」

昔のあだ名を言われるのは恥ずかしくて、ユティアは曖昧な顔をして頷いた。

ラタの町の貧民街で生活していたが、何年か前に奴隸商人に捕まつて売られていってしまった、顔なじみの少年だった。

彼は背中をさすりながら起き上がり、昔とはまるで違つてしまひとした格好をしているユティアを上から下まで何度も眺めた。

ユティアは正門からレクトと外に出て、誰もいない裏道のほうに回つた。

「へえ、あのひとに買われたのかあ」

レクトに実は隣国の姫なのだと説明しても、自分でも嘘のよう話を聞こえるのでやめておいた。そうでなくとも、他人に自分の素性を明かすのはカディールたちに禁止されていて、通常はカディールと兄妹ということになっている。レクトには誤解されたが、ユティアも訂正する気はなかつた。

「でも贅沢させてもらつてんじやん」

レクトは、ユティアが最後に覚えている彼の姿とたいして変わらないぼろぼろの格好を今でもしている。けれど、ユティアのそれは簡素だが真新しい少女の服。そんな格好で昔の知り合いに会うのは少しおかしい気がした。

「レクトは？」

「ああ、おれはしばらく奴隸やられてたけど、逃げた」

「え……そなんだ」

「じゃあ、いまは？」

彼は逃げることができたのだ。捕らえられても絶望することなく。カディールたちと過ごしていると、そんな世界もあつたことを忘れてしまいたくなる。けれどきっと、ここにも飢餓に泣いてる子供たちはいる。

「あー……うん、いつしょにいる仲間と、食べ物分け合つてるよ。毎日市場にいるんだ」

レクトは少し顔をゆがめた。旅人として神殿の部屋に泊まっているユティアには、変わり映えのない毎日を話したくないかもしない。

それでも、一人ではないというのは、少しだけ救われる。未来の

ない、生活をしていても。

「あ、そーだ。おまえも逃げて来いよ。ここにいるやつらみんない
いやつだし、もうぶたれたりしねーからわ」

「……あのひともぶつたりは、しないよ」

言葉はきつかつたり、ぶつきらぼうだつたりするけれど、基本的にカティールは優しい。そして、シオンは女性のように寛やかだ。カティールは気をきかせたのか、一人とは離れているが、どこかで視線を感じていた。あまり聞かれたくない内容だった。

「そんなの最初だけかもしんないだろ」

「奴隸とか、そんな……扱いじゃない、から」

「じゃあ、愛人つてこと?」

「つー」

ひどい言い方だ。けれど、そう思われてもしかたない状況だったから、ユティアは反論すらできずに下を向いた。それを肯定と受け取つたのか、レクトはさらに言葉を続けた。

「おまえ昔は、奴隸なんてぜつたいやだつつてたじyan。それなのにそんな高いものもらつたからつて使われていいいのかよ」

レクトの視線は、右手首にある銀の腕輪に向いていた。純銀で細かい鷹の絵が描かれているそれは、見るからに高級品だ。

「これは、そんなんじやないよ」

伸ばされたレクトの手から避けるようにして右肩をかばうと、レクトは少し驚いたようだった。だが、反対の腕を強くつかまれた。「前みたいにさあ、それ売つたらけつこいつ金になるじyan。おれ、この町でもそういうの売れるところ知つてるからさ」

「や、やめて……つー」

振りほどこうとしてもがいたとき、ふいにその腕が解放されて、よろめいたところを別の腕に支えられた。

「そこまでにしとけよ。度が過ぎると俺も、手加減しねえからな」カティールがレクトの手をユティアから無理矢理引き剥がして、軽い力で押した。それだけでも子供と大人の体格差があり、レクト

は後ろに倒れてしまう。

「……な、なんだよ。邪魔すんのかつ」

「そりやこっちが言いたい」

レクトは反論しかけたが、カディールに見下ろされて口をつぐんだ。カディールの背中に隠れたユティアに少し視線を投げたが、諦めたように立ち上がり走ってどこかへ行ってしまった。

「つたく、たちが悪いな」

「……」

その言葉に、ユティアはうつむいた。

カディールはそんなユティアの様子を気にするでもなく、軽く促して神殿に入していく。

薄汚れた服を纏った者など一人もいない、清潔な世界。その中を抜けて、階段を上っていく。

「そうそう、シオンも戻ってきてるぞ。あんたに」

カディールは、三階までの階段を上ったところで振り返った。けれど、ユティアは一階からそれを見上げたまま、追いかけて足を動かすことができなかつた。

(　　たちが、悪い。それは、わたしも同じだ)

ユティアはほとんどを一人で生きてきたが、それでもレクトは、交流のあつた数少ない知り合いの一人だ。仲間、と呼べないこともない。

「どうした?」

彼にはきっとわからない。

当たり前のようだ、この生活に慣れているのだから。

(レクトとわたしは、同じ　　)

いつかきっと、それをカディールが知つたら、レクトのように軽蔑されて突き放されるのだろうか。卑しいもののように、いらないもののように。

「おい、ユティア!」

カディールはいつのまにかユティアの目の前にいた。

「どーしたんだよ？」

「……な、なんでもな……」

言いかけたところでカティールに額をこつんと叩かれた。

「ばかだな。何でもないなら、何でもない顔できるようになつてから言えよ。俺でもわかるぞ、あなたの嘘」

はつとして顔を上げると、彼の苦笑がすぐ近くにあった。

彼の紺碧の双眸は、嘘がない。

穢れていなからだ。

肩に触れられて、思わずユティアは一步下がつた。
触れたところから、この醜い感情が溢れ出て彼に知られてしまつた。

「ユティア？」

「わたし、は……」

食べ物があまりにもなくて、空腹を我慢できなくて、貴族や金持ちの商人から盗んだこともある。

(知られたくない)

飢餓で倒れていく子供たちを見てきた。その恐怖から、そつやつてなんとか逃げて生き延びてきた。

悪いことだとわかつていた。けれど、空腹で何日も泣いた。

そうやつて死んでいく子供たちを見て、食べ物の分け前が増えるかもしづらいとどこかで囁く自分の醜い声を聞いていた。

(……やっぱり、お姫様になんかなれないよ。ここはわたしが生きていいい場所じや、ない)

物語にある姫君はそんな悪いことはしない。

豪華な服を着て、美しく笑っている。誰にでも平等の慈愛を降り注ぐ。

理想の貴婦人。

「昔の知り合いに会つて、いろいろ思い出しちやつただけ、だから何も言いたくなくて、ユティアはそう取り繕つた。これは、嘘ではなかつたから。」

「仲良かつたのか？ そうは見えねえけど」
コティアは勢いよく首を横に振った。

利害だけでつながっていた。

お互い、生きるために。ただ、それだけのために。

「俺たちといつより、そつちに戻りたいのか？」

「……戻りたく、ない」

ついこの前まで感じていたすべての辛酸は、ここにはないのだから。

「じゃあ、何が不満なんだ？」

「……え？」

「この気持ちは、不満というのだろうか。
(なんの心配もなく、食べていけるのに)

何かに脅えたり、苦しんだり……そんなことから解放されたのに。

「あまりコティアをいじめないでくれるかな」

はつと顔を上げると、いつのまにかシオンが部屋から出てきて、コティアたちを見下ろしていた。

「全部見てたくせによく言ひ」

カディールはコティアをつかんだ手を離した。

「君も女性に優しくする術を学んだほうがいいよ」

「だつて、はつきりしねーからさ。悩みとかあるんだつたらせつと言えばいいんだる」

「……だから君は粗暴だと言うんだよ、カディール」

シオンの呆れた口調と、カディールの憮然とした表情。

この数日で、これらのやりとりが彼らの日常なのだと気づいてしまった。最後にカディールはそっぽを向いてしまつことが多いのだが、今回もやはりそうなった。

「 もう、いいですか？」

「 はーいっ。カンペキでーす」

少女の高い声とほぼ同時に、カディールとシオンが部屋の中に入ってきた。

ユティアは気恥ずかしくて、その少女の背中に隠れてしまったかつた。けれど、カディールと違つてユティアと同じ背格好だから、完全に隠れることができるはずもなかつた。

「 よくお似合いです。サイズも合つていますか？」

「ええ、それはもう！」

彼女はアジアと名乗つた。大人びているように見えたが、ユティアと同じ年だと聞いてかなり驚いた。自分が子供すぎるのだろうか。「あ、あの……ええっと」

「 なに恥ずかしがつてんだよ。けつこう似合つてんじやんか」

相変わらずアジアの後ろにいるユティアの手を、カディールが引いた。それだけで長い裾を踏んで転んでしまいそうになる。（ほ、ほんとに似合つてるの、かな）

お世辞だらうとどこかで疑いつつも、真に受けてしまいたい気持ちもある。自分では見えないから、想像することしかできないのだが。

「 まあ、私の見立てですから当然です。女性の身に着けるものを選ぶのは得意なんですよ」

「冗談のように言つて笑つてみせるシオンだが、カディールが肩をすくめてどこか肯定しているのを見ると、こういったことが以前もあつたのだろうと思わせる。

アジアに手伝つてもらつて着た新しい服は、今まで来ていた白ではなく、さまざまな色で染めた糸で織られている。薄い布を何枚か羽織り、それらを腰の紐で留めているのだが、その色の重なりが趣

味のいい獨特な色合いを生み出していた。足首までの長い裾、ゆつたりとした袖、貝や陶器の首飾り……どれをとってもユティアが身上に着けたことのないものばかりだ。

無造作に伸ばされたままだった髪の毛も、アジアと神殿の大衆浴場に入れられ、毛先を整え、オイルなどで艶を出し、右肩で軽く結つて、陶器の花のかんざしをつけた。

くすんだ色の髪の毛は、美しい艶のある黒髪に変わっていた。

「なかなか帰つてこねーと思ったら、こんなに買い込んでたのか」「だつてこんな生成りの服では失礼だよ。女性は着飾つて悪いときなど一瞬たりともないからね」

「勝手に言つてろ」

こういつた話題に関して、カディールはシオンに特に敵わないようだつた。

「ほんとかわいいよお。この服もきっと喜んでるしつ」

アジアはこういつた服を作つて売る店の娘だという。シオンが頼んで手伝いに来てもらつたらしいのだが、ユティアから見るとアジアのほうが間違いなく可愛らしい雰囲気で、そんな少女に褒めてもらつのはお世辞だとしても恥ずかしかつた。

「つまらない服ばかり着ているから飾つてあげたいだなんて、ユティアもいいお兄さんがいてうらやましいよ。あたしが作った服、そうやって着てもらえるとすっごくうれしいんだつ」

「でも、わたしよりシオンのほうが似合いそう……」

ぽつりと思つたことを正直に言つたら、カディールが大爆笑し、アジアは絶句した。一人、当の本人であるシオンだけは涼しい顔を崩さなかつた。けれど、本人を含めて誰一人として反論はしなかつた。

彼らの反応を見ていると、この想像もあながち外れていないような気がして、少し落ち込んでしまう。ユティアも人並み程度には着飾つてみたいという欲求はあるのだが、女性扱いされることに慣れていません。そもそもそんな欲求を言える立場にすらなかつた。

「こいつ実はけつこう女の格好するんだぞ。よくわかつたな、コテ

イア」

「ええ？」

「コティアのほうがお綺麗ですよ」

「……」

余裕のあるその微笑には、やはり敵わない気がした。彼のほうが理想の姫君にみえてくる。

彼は姿だけでなく、物腰や雰囲気まで洗練されている。それは貧民街での物乞いや奴隸としての生活しか知らないコティアには相似できないことだった。

「あ、じゃああたし、お店あるからもう戻りますね。あとほお兄さんたちに褒めてもらってね」

「ありがとうございました。アシア」

店まで送ると言つてくれたシオンを、アシアは顔を赤くしながらも丁寧に断つて部屋を出て行つた。すると、外からきやあきやあと叫ぶ別の少女たちの声が聞こえてきたのだが、シオンは聞こえないふりをした。

「気にすんな。こいつが女に騒がれるのはいつものことだ」

カディールが、呆然と帷のほうを見やるコティアに、フォローにもならない言葉を投げかける。前にかかる銀髪をさらりと手で流したシオンも、苦笑を返すだけで否定はしなかった。

彼と行動をともにしてからずっと、知り合つ女性たちはシオンに恍惚の眼差しを向け、コティアに憎悪の眼差しを向けていた、その理由がやつとコティアにもわかつた。

「どうぞ、コティア」

やっぱり恥ずかしくてうつむいてしまったコティアに、シオンは丸くて薄い銀板を渡した。見たこともないものだった。

「これは鏡です。こ自分の姿を確認できますよ」

「かがみ?」

水に映る自分しか見たことのないコティアは、その鏡をおそるお

そる覗き込む。

滑らかで柔らかい黒色の髪に縁取られた、少し田て焼けた少女の顔がそこに映つている。おかしいと思つて田を見開くと、鏡の中にいる黒の双眸もゆっくつと開かれた。

「え、ええつ？」

もう一度よく見ると、鏡の中の少女も驚いた表情をした。首をかしげたら、同じようなしぐさをした。

街中で見る、普通の少女となんら変わりない……むしろそれ以上にかわいらしく着飾った自分が、そこに映つている。

（これは、誰？ わたし、なの？）

何度も覗き込んで確認しても、信じられなかつた。

「さすがの私でも女性の美しさには敵わないんですよ、コティア」「さういふことぢやないよな」

たしかにそのとおりに聞こえて思わず頷いてしまつた。

「コティアまでそう思われるのですか？」

「あ……『ごめんなさい』」

だが、心外とこう表情ですり、シオンは綺麗だった。自慢したくなるのもわかつてしまふほどだ。

「あんたが謝る必要なんかねーっての。全部ほんとなんだから」「少なくとも貴方に負けない自信はあるけれどね」

「女装で勝つてもうれしくねえっ！」

二人のやりとりは、聞いているだけで樂しい。

（いつまでも、このままだつたら……こいな）

昔のことなどすべて忘れて。

辛いことも悲しいことも。

思い出をくなればいいのよ。

（でも、どうしても比べてしまう）

突然の変化。あのころの惨めな自分と、今の自分。やつぱりまだ、惨めなのだろうか。

「お、おこつ。どうしたんだよ、コティア」

「……え」

慌てた表情で、カディールがユティアの顔を覗き込んでいた。

「なんで泣いてるんだよ」

「な、泣いてなんか

両手を頬にあてたら、たしかに溢れてくる涙を感じた。

空腹でもないのに。

「やつぱりこの服が気に入らねーのか?」

「ち、ちが……っ」

「じゃあなんだよつ」

責められるような口調で問われたが、ユティアにもわからなかつ

た。自分でも気づかなかつた涙だ。

ただ首を横に振つた。

カディールの大きな手が、乱暴だつたけれど涙をぬぐってくれた。
(どうして、こんなに優しくしてくれるんだろう)

他人を気遣う余裕などなかつた。ユティアも周りの子供たちも。そんな世界があつたのに……。

ここは、慈愛に満ち溢れている。

二章 時を止めるもの、戻すもの 4

シオンに勧められた屋上は、空がさらに近くて広かつた。
どこまでも見える気がする。

「どうですか？ 綺麗でしょうか？」

飲み物を持つてあとから現れたシオンに、コティアは何度もうな
ずいた。

「太陽が沈んでくのは、ずっと怖かったのに……もう、見てても平
気」

静かに、音もなく、光が失われていく。そのあとに待つのは、永
遠とも思えるような闇だった。

それを見るのが一番怖かつた。綺麗なはずの夕陽は、コティアを
闇の中に引きずり込むだけだった。

いつ晴れるとも知れない、永遠のような黒。
けれど朝になつてまた、殴られるかもしれないと言えるのも恐ろ
しかつた。

それが今は、単純に、綺麗な光だと思う。

「どうぞ。今日は天氣もよかつたので、のどが渴いたでしょ？」
シオンは透明な水に少し色のついた飲み物をコティアに渡した。
見たこともないものだつたけれど、薄い土器から伝わる冷たさに惹
かれすぐさま口をつけてみる。

「……っ！」

驚いて手を滑らせそうになつたところを、シオンが器を支えてく
れた。

「大丈夫ですか？」

「……こ、こんなに甘いと、思わなくて」

初めての味。けれど、身体に優しくて、ほつとする味だ。

「蜂蜜です。あまり好きではありませんでしたか」

「ううん……すごくおいしい。花の蜜に、似てるかな」

春になれば花が咲く。野にあるそれらを摘んで食べても、誰にも怒られなかつた。コティアが知つてゐる甘いものは、そのくらいしかなかつた。

一気に飲み干してしまつたコティアを見て、シオンは器を受け取つた。

「甘いものって元気になるでしょう?」

「……あ」

本当にそうだつた。

(どうして、シオンはわたしがほしいものを知つてるんだろう)
それが洞察力や経験なのかもしれない。

彼は、コティア自身すら気づかぬうちに望んでいたものすら、すべてわかっているようだつた。

「カディは?」

「大衆浴場に行つてますよ」

そういうえば、早く入りたいと脳間に言つていたのを思い出す。

「シオンは入らないの?」

「カディールですか? それは……「うむうむですねえ」

のんびりとした口調でシオンはそう言つて笑つた。

どんなときでもカディールかシオン、どちらかがコティアのそばにいる。彼らと出会つてまだ数日だつたが、自分が狙われてゐるであろうことは身にしみて理解できたから、一人にさせないようにしてゐるのだ。

「う」「ごめんなさい……」

そんなことにも気づかず、無神経な質問をした。

彼らのほうがずっと、氣の休めるときなどないだろ?」

「コティア」

呼ばれて見上げたシオンの白皙の顔は、夕焼けで少し赤く見えた。

「そんなに謝らないで。なにも悪いことなどなさつてないでしよう」

「でも、さつきだつて。服せつかくもらつたのに」

なぜか泣いてしまつて、カディールに怒鳴られた。一人に満足な

お礼も言えていない。

(うれしかつたのに)

似合「うとか、かわいいとか。

初めて言つてもらえて。

「嬉しいときもひとは泣いてしまうんですよ」

「……そう、なの？」

コティアが泣くときは、怖いとき、痛いとき、そして空腹のときだけだつた。けれどいまは、そのどれからも遠ざかっている。

「でも、今度からは笑つてあげてください」

「え？」

「カディールがね、心配しているんです」

心配というよりも怒られている気がしている。

「一度も笑つてくれないから、服でも買つたら喜んでくれるのではないかと」

「あ……」

「けれど、彼に任せたらろくでもない格好にされてしましますから、私が代わりに選んできました。だからこね、カディールの提案なんですよ」

「そう、だつたんだ……」

だから泣かれて焦つたのかもしれない。

本当はうれしかつたのだと伝えたいけれど、もう遅いだろうか。

「だから、ね。笑つてあげてください」

自分がずっと笑つていなかつたことなど、コティアはまったく気づいてなかつた。今までの生活で笑顔になれるような出来事は少なかつた。

「……うん、そうする」

もう忘れてしまつた感情。

(ちやんと、笑えるかな)

「……はこりいろなものを売っていますから、なにか欲しいものがあつたら遠慮なく言つてくださいね。贅沢はあまりできませんけれど」

町を歩いて見てみたいとこうコティアの望みに、カティールとシオンはいやな顔をせずに付き合つてくれた。

「そ、そんな……この服だけでもう、十分、だし」

すでにかなり贅沢をさせてもらつていい気がする。新鮮な野菜や果物、それだけでコティアは幸せだ。

「俺には無駄遣いすんなとか言つてたくせによ」

「女性に贈り物をするのは、古今東西、重要なことだからね

「でも……お金、あるの？」

いつまでも泉のように沸いてくるはずもない」とはコティアでもわかる。さすがに心配になつて、おもわずコティアは尋ねていた。少し驚いた表情で一人はコティアを振り返つた。

失礼な質問をしてしまつたのだと、そのときやつと気づいた。

「あ、ごめんなさい」

「いいんですよ」

「ていうか、あんたが気にすることじやねーし」

コティアの頭をなせるカティール。子供も扱いされているが、實際子供だったから何も言えなかつた。

奴隸になる前は、母とやつていたように藁を編んでそれを売る生活もしていた。母のいたころはそれだけでなんとか食べていけたが、コティアひとりではほとんど稼ぐことはできなかつた。

貧民街にいるよつになり、仲間たちといつしょになつて、貴族たちから金銭を盗んで、食べ物に換えたこともあつた。罪悪感を背負つて食べるには楽しくなかつたけれど、それでも空腹よりもましだつた。

「大丈夫ですよ、ユティア。カディールはこのとおり礼儀のかけらも知らないんですけど、傭兵なんかをしてお金をかせいでいるんです」

「よう、へい?」

「つまり、要人たちの警護です。礼儀を知らなくとも、腕はありますから」

「いちいち、礼儀知らないとか言うなっ」

彼の反論は、シオンに笑顔で軽く頷かれて終わってしまった。

「じゃあ、ここには長くいるつもりなの?」

「実は、まだわからないんです。王都に行きたいのでその情報集めと、できればカディールには少し資金をかせいでおいてもらいたいですし」

中規模の街で傭兵をして手柄を立てれば紹介状などをもらえて、大都市で仕事を探しやすいのだという。

カイゼの街の大通りはそれなりに多くの人々が往来しているが、人々はどこか疲れた表情をしていた。ユティアがきょろきょろとあたりを見回していると、野菜を売る市場の小道から中年の男が飛び出してきた。

「おい、ジュラが来るぞつ」

男が叫ぶ。

そのとたん、あたりは騒然となつた。

荷台から運んでいた野菜が落ちるのも気にせず走り出す商人たち、道端で座り込んでいた野菜売りもあわてて片付けて奥に隠れてしまつた。通りの真ん中で鞠を蹴つていた少年も、母親らしき女性に抱えられて物陰に消えた。

そのただならぬ様子に、ユティアもシオンに促されて同じように通りの中央を開けた。急に静まり返る通りの両脇で、人々は地面に頭をつけてひれ伏していた。見る限り、立っているのはユティアたち三人だけだ。

「……なんなんだこれは」

カディールが咳いたのと、うしろから馬車の近づく音を聞いたのはほぼ同時だつた。

振り返ると、町中だといふのに速度を落とさない幌つきの馬車が、こちらに向かつてきていた。

それを確認した彼らの視界に、じろじろと通りの中央に向かつて転がつていく鞠が映る。それを追いかける幼い少年。母親はひれ伏していて自分の子供には気づいていないようだつた。

「……おいつ！ 危ねえぞっ」

カディールが声をかけても少年は鞠を追いかけていた。馬車はまっすぐに、まるで狙つているかのように、速度も落とさず少年に向かつっていく。

「馬車っ！ 止まれ、なに見てんだよっ」

「……カディールっ」

シオンの制止の手も届かず、カディールは通りに飛び出していった。だが、馬車の速度にかなうはずもない。

(いやだ)

ユティアは思わず一步下がつた。見たくない。

「止まれっ！」

カディールの罵声。

人々が少し、顔をあげた。

「いやああああっ！」

これは母親の叫びだらうか。

けれど、カディールの目の前で、子供は宙を飛んだ。長身のカディールの目線よりも高く。

どさりと背中から落ちる少年。

だが馬車は、何事もなかつたかのようにその場を走り去つていった。

(……この子はまだ、しあわせだ)

カディールがすぐに少年に駆け寄つた。

母親が少年を抱いて、泣き崩れた。

見ていた人々が少年のまわりに輪を作った。

(けれど、そうじゃないときもある)

ユティアと仲のよかつた少女も昔、馬車に轡かれた。あのころはレクトもいて、目撃者もたくさんいた。御者も馬車を止めて、一度は降りきただれど、貧民街の子供だとわかつたとたん、謝罪もなくその場を去つていった。誰もがとたんに無関心になつた。

「ユティア……大丈夫ですか」

曇つた表情になつたユティアにすぐに気づいたシオンが声をかける。硬い表情のまま、いちおうは頷いた。

もう昔のことだ。

「……あのこは、大丈夫なの？」

「わかりません」

ユティアが傍らのシオンを見上げると、彼は普段と変わらぬ静かな瞳でカデイールを見つめていた。ユティアもそちらに目をやると、カデイールが少年を抱きかかえて向かつてくるところだった。

「まだ息がある！ 神殿に連れてつてやる」

「わかつた」

カデイールのその行動はあらかじめ予期していたのか、シオンは当然のようにななづいた。カデイールは少年を抱えて先に走り、ユティアたちは母親や数人の知り合いとともに少し遅れてあとを追つた。

コティアたちが到着してすぐ、カディールからその少年は助からなかつたことを告げられた。

「つたく！あの馬車なんだつてんだつ。許せねえ」
カディールは優しい。コティアはそう思つ。
仲のよかつた少女が目の前で死んでしまつたときでさえ、コティアは悲しかつたけれど泣けなかつたし憤りを感じなかつた。
(だつてしようがなかつた)

誰にも振り返つてもらえないし、誰にも助けを求められない。神殿に行けば誰でも怪我を治してもらえるといつことだつて知らなかつた。生きていることすら、疎まれていた。

「でも、仕方ないですよ」

母親に付き添つていた男の一人が、落胆した表情でぽつりとつぶやく。あのころのコティアと同じ、諦めるしかないのだと。

「あんたらは……旅人かね」

シオンが軽く頷いた。

「あの馬車はジュラという男のもんだ……逆らわんほうがいい」「何があつたんですか？」

「もとは領主の私兵だつたらしいが、いまじや領主のほうがいいなりさ……町中じややりたい放題。抗議すれば殺されるだけだしな……」

…

王都に直接訴えようとしたらしいが、その使者にたつた男たちは二ヶ月たつても戻つてこないのだといつ。

「それ以来、関所も閉められちまつて、誰も出ることができる」

「……領主の紹介状どころじゃねーな」

「旅人たちは黙つて引き返すか、関所を破ろつとして殺されるか……」

「そのどちらかだな」

王都サルナードへは、カイゼの街からでなくとも可能だが、遠回

りになる上にここからだとその道にはほとんど町らしき町はない。逃げ回る過酷な旅を続けてきたから、シオンは少しでもコティアの移動を少なくさせるためにこの道を選んだ。

「どのような人物なのですか、そのジュラというのは」

「いつも黒い布で全身を覆つてゐるから、誰もその顔はわからんねえ。だけど、剣を持たしたら抵抗する間もなく殺されるって話だ……」

その言葉を想像して、コティアは少し顔を逸らした。想像しなければよかつたと後悔した。

「……あなたも左利きだね」

「だからなんだ？」

カディールの背中の剣は、左手で抜けるようになつてゐる。男はそれを見て、少しだけ眉をひそめたのだ。

「ジユラも左利きだという話だつた。だから、つい……左利きの剣使いなんかを見ると、あまりいい思いはしないんだ。……すまん」

「くだらねえ」

機嫌が悪そうに、カディールは舌打ちした。

そんな態度にも男は気分を害された様子もなく、逆に表情を少し和らげて口を開いた。

「でも、希望はある。おれらを救つてくれるひとがいて……」

「みなさんっ。『ご無事ですかっ？』

説明していた男が急に目を輝かせたちょうどそのとき、一人が部屋に飛び込んできた。

二十代前半に見える若い青年は、コティアたちの視線に軽く会釈しながらも、部屋の奥に走つていった。そこには寝かされたままもう一度と動かない少年とその母親がいる。

彼らを気遣い、励ましている青年のうしろ姿を、人々は安堵の瞳で見やつていた。

「あれはなんだ？」

「ああ、トウリード様だよ。領主クイードの息子なんだ」

「なんだつて？」

カティールが声を張り上げたが、男は涼しい顔をして首を振った。領主はジュラとともに増税などを敢行しているというのに、その息子はここで歓迎されていたのだ。

「あのひとはおれらの味方してくれてる。これ以上増税にならんよう進言してくださってるし、ジュラの部下たちが暴れたときも駆けつけてくれるしな」

彼の功績は周知らしく、部屋に現れたその姿を見つけた人々は、どこかほっとした表情を浮かべて彼のもとに集まつていった。「領主の長男は逃げ出しちまつて、たまにしかカイゼに戻ってきてないんだがな、じ次男のトウリード様は本当によくやつてくれるよ」そのトウリードは、母親たちと話をしたあと、こちらにやつてきて丁寧に一礼した。中背の痩せた男だったが、よく使いこまれた剣を腰に帯びている。

「貴方があの子を助けようとしてくれたのですね」

「……けつきよく無駄だつたけどな」

カティールが悔しさからか、そっけなく答えた。

「いいえ。でも怒つてくださつて、感謝しています。私の力不足でこのようなことに……」

「実の父親を止められねえのか?」

カティールの口調に怒氣が混ざる。

「お恥ずかしい話ですが、今ではもう父は私よりもジュラの話を聞くようになつてているのです……」

惨劇はいつまでも続いていくのだろうか。

(こここのひとたちも、生きているのが辛いのかな……)

当然誰にでもあるはずの権利が、他人によつて奪われていく。ひつそりと隠れて住むことすら許されない街。

「どうして、ジュラといつ男は、この街でこれほど権力を得ることができたのでしょうか?」

シオンの当然といえば当然の質問に、だがトウザードは曖昧な表情をして首を横に振った。

「何か父の弱みを握つていて、脅されているのだろうとしか
それでもトウザードは何かを成そうとしているのか、諦めの眼差
しではなかつた。

昼間は暗い表情を見せていた街も、深夜を過ぎると一変する。異なる顔。

人気のなかつた一角は、急に賑やかになつていた。路上には酒を売るカウンターが並び、薄着の女たちがカディールに好奇の視線と甘い言葉を送る。

常にシオンのそばにいるせいであまり注目されることはないが、カディールも女性受けのよい風貌をしていた。シオンのような至高の芸術的美貌とは違う、精悍で野性的な面立ちちは、人目を惹きつけるには十分な魅力にあふれている。

だが、甘く艶美な声の誘いにも、カディールはまったく揺らがなかつた。完全に無視を決め込んで、目的地へのみ向かう。

この遊里に、王都から遠回りをして来たばかりの旅人がいるらしいという噂を手に入れたのはシオンだ。

（だったらあいつが来ればよかつたんだ）

彼のほうがこういう場所には慣れているだろう。偏見だが、女性たちへの常日頃の扱いを見ているとそう思つてしまつ。

（この情報だつて神殿の女から聞いたに決まつてる）

あの笑顔ひとつで、シオンが手に入らない情報はほとんどないのではないかと思えるほどだ。

だが、その旅人というのにカディール自身興味があるのも事実だつた。このあたりをうろうろしていて、たまにカイゼにも現れるらしいが、特に何をするでもなくまたどこかへ消えてしまうらしい。教えられた簡素な看板には、土器の杯が彫られている。通りに突き出たカウンターに、一人の男が寄りかかって杯を傾けていた。

「薄暗い夜だねえ」

三十歳手前に見えるその男は、カディールを見つけても特に警戒するでもなく、のんびりとそう声をかけてきた。

満月ではないが月も見えて、雲も少なく星が輝いている。物理的に暗い夜ではなかつた。

カウンターに小銅貨を一枚置いた。カウンターの中の女が、杯を用意する。

「どうせなら僕が持つてきた酒を試してみる？ カストゥール王国からの交易のワインだよ。珍しいだろ？」

「やだあ、あれは銅貨一枚ぽっきりで出したくないわあ」

血漫げに言う男に、甘い声で媚びる女。それはカディールがどうしてもなじむことのできない世界だ。

金はないと断わろうとしたとき、男は銀貨を差し出した。珍しいワインとはいっても一杯に払う金額ではない。カディールが目を瞠ると、男は気にするなというように片手をつぶつてみせた。

「あら。今日は気前がいいのね」

女はあっさりと機嫌を直し、カディールの小銅貨と男の小銀貨を懐にしまって、秘蔵のワインを杯に注いだ。

そのあとすぐに女は二つのワイン壺を抱えて、その場から姿を消した。

（人払いのための銀貨、か）

男はカディールが現れることをあらかじめ知つていたようだ。だが、それに言及せず、とりあえず珍しいといつその酒を一口飲んでみる。

「強いよ、それ」

たしかに、高いだけのことはあるのか、通常出回っているものよりもかなり強いワインだった。だが、この程度で酔えるような身体ではない。

そのまま一気に飲み干してしまつと、カディールは杯を置いて男のほうに向き直つた。

彼は、すでに空になつていた自分の杯を手でもてあそびながら、邪気のなさそうな笑みを返す。

「さすがだねえ。左利きの英雄さんは」

「なんだそれは」

「あれ？ 知らないの？ 男の子を助けようとしたのでしょ。すでにずいぶん有名になつていてるよ」

その表情からは、事実なのか冗談なのか判別できなかつた。

「信じていな顔をしているね。でも、あのジュラに逆らおうとする住人は誰もいなかつたから、この街で君は珍しい存在なんだよ」男は杯を空中でひんつとはじいた。それは回転してカティールの使つた杯の上に綺麗に重なつた。割ることもなく、音も静かに。「ジュラがカイゼの街を仕切るようになつて、たしかに治安は悪化したかもしれない。けれど、領主クイードだったころも何もしていなかつたのだから、たいして変わらないんだよ本当はね」

「何でも知つてる口ぶりだな」

何も聞かずとも、彼はペラペラとカティールに話していく。簡単ではあるが、どれを真実とすればよいのか……。

「ええ、僕もあの館で働いていたから」

あつさりと、そう告げられた。驚く余裕もなく、彼は話を続ける。「たくさん奴隸たちが毎日殴られていた……。それを、ジュラは彼らを奴隸ではなくて、普通に雇うようにしたんだよ。だから、住人たちにあれほど嫌われているジュラに、多くの仲間がいるんだ」ユティアの昔の知り合いだと言つていたレクトを思い出す。

奴隸として働いていたけれど、逃げたと言つていた。もし、逃げたのではなくジュラに組しているのだとしたら……。

「お前も、奴隸だったのか？」

「……さあ？ どうだろうね」

視線を逸らして、彼は空を見上げた。

月が雲に隠れていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7023x/>

【夢幻の大陸詩】 Blue Bird & Black Bloom? ~勇の章
2011年11月20日03時21分発行